

会長講演

家族看護実践の展開—文化や社会に焦点を当てて—

第12回学術集会長 千葉大学 石垣和子

家族というものは看護の対象の中でも特に奥深い側面がある。人間は複雑系であるといわれるが、家族では複数の人間が強い感情で結びつきあい、その強い感情の背景には一人一人の生い立ち、人生の出来事、社会的立場や社会から受ける影響があるという具合に、分解するのはなかなか困難であり、その総和の落ち着きどころを読み取ることは大変難しい。しかし、看護職者は以前から試行錯誤的に家族看護実践に果敢に挑戦してきた。先人たちの実践内容には大変すばらしいものがあるが、そこにおいては家族ごとの文化的文脈や社会システムからの影響はどのように対処されてきたのであろうか。文化的文脈や社会からの影響への何らかの直感や大まかな掴みが頼りだったのかも知れない。

ここでは、家族看護の実践を展開する上で大切な文化的能力と、社会システムへの関心について考えてみたい。

家族は、看護職者は病人のためにいると通常は思っており、自らが看護職者のケアの対象になっているとはゆめゆめ思っていない場合が多い。家族に関心を向けるとき、こちらの関心を素直に認めてもらうには、看護職者が豊かな感性と節度ある職業意識を持っているかどうかは重要である。

看護職者が家族と出会うとき、家族だけでなく、看護職者も文化的文脈の中で生きていくことに気づかされることが多くある。

たとえば、想像を超える価値観、生活様式の家族に出会うとする。見知らぬ家族との出会いは、洞察と観察そして言語的コミュニケーションなどで文脈を理解しなければ受け止められないであろう。逆にそうしなければ理解できない自分の文化的文脈にも看護職者は気づく。それはとりも直さず看護職者のそれまでの文化的文脈の反映である。全く想像もすらないのだから。すなわち、知らない、わからない、異なるという気持ちの芽生えが相手に対する関心を抱かせ、それが理解に向かう作業の起点となる。

日本は文化的に均一の社会であるといわれる傾向があるが、それは西欧から見た大きなくりの文化であって、看護者が問題にする文化的文脈における文化は、もったきめ細やかな人々の気持ちの機微に分け入るような類のものである。そのような観点からは、ぼんやりと油断して対象を眺めていては気づくことができない微小な差異に気づくことが大切なこととなる。すべてが想定される範囲内と不遜にも考えてしまうことは避けねばならないであろう。次には気づいた差異を相互の文化的文脈や、社会的条件に照らして相対化することが必要になる。

このように、看護職は家族に抱く自感情を自ら客観視しながら真実の家族の姿を求めることが重要で、そこからかわりが始まると考えている。